

章では東亞に於ける瓦甃使用の發達流傳を説き、新羅瓦が高句麗百濟を經由して佛寺建築とともに支那から傳つたことを述べ第三章ではこれらの古瓦を出土する百個所に近い宮殿址・寺址を挙げ、今日吾々が見てゐる大部分の新羅瓦は新羅統一時代の上半期、即ち西暦七世紀の後半から八九世紀の所産なるを論じ第四章では瓦塼の用途から圓瓦(いはゆる巴瓦)、平瓦(いはゆる唐草瓦)それから下り棟の階圓瓦、軒廻りの隅にある隅瓦、極木の端の極木瓦、また土壁の端などに用ひられた小瓦、鴨尾、鬼板などの種類があり、甃には敷甃と壁甃があることを説く。第五章第六章に入つて、圓瓦・平瓦の文様を系統づけ、圓瓦は蓮華文系と禽獸文系に、平瓦は唐草文系と飛天禽獸文系にそれぞれ二大別し、第七章では敷甃と壁甃との二種類を説く。これによつて新羅瓦文様の全貌はほゞ明らかになつたわけで、當代の日本・渤海乃至唐(?)の瓦塼との相違點も一應了解される。次に第八章は慶州古瓦の圖紋と出土遺跡との關係と題し、(1)圖紋を異にした多様の瓦が一寺址から發見されること、(2)同一圖文の圓瓦、平瓦が隨處の違つた寺址から發見されること、(3)下顎文に於いて全く同一の型文が違つた主文をもつ瓦に現れることの三點を特に注意された。これによつて次章に於ける製瓦工場の限られてゐたこと、従つて造寺とは別に瓦の製造が行はれたと推定する伏線とする。第九章は結論で、新羅瓦の特質を論じてゐる。即ち、新羅瓦甃は文様を要素的に見ると、印度・波斯その他に系統をひくものがあるがしかしそれらは皆支那唐

朝の藝術界經由のもので、しかも新羅瓦文様の凡ての要素はこの唐代の工藝に遡源することを得るのである。しかし、これを瓦甃に應用し、極度に驅使したところは、實に新羅獨特の發達であつて、新羅の鍍金細工、高麗の青磁にも類似する。それは瓦甃輸入とは別に優れた彫塑の技術者達があり、その傳統が遂に外來の瓦甃をかくまで變化し、多様に浮彫的に發達せしめたと解せられる。しかも、それは建築の一部分としての瓦といふよりは、一個の浮彫タレットとして細い表現を行つたもので、architectonicといはれるよりはむしろ plasticである。

本文七十二頁、挿圖四十四、新羅瓦集成圖版七六枚。その圖版配置の苦心、そしてその整齊は本文と相並んで高く評價さるべきで、圖版を繰ることだけでも新羅瓦の大綱と、東亞の瓦甃中に占める新羅瓦の位置がほゞ理解できるであらう。本書における圖版の精美は古瓦の研究家のみならず、たゞこれを愛好する人士及びこれを利用せんとする圖案家の満足をも獲るであらうと思ふ。(刀江書院發賣(水野))

● 中華民國新地圖 申報館發行 定價銀貳拾五圓

● 中國分省新圖 同 同 銀參 圓

支那新聞界の雄申報の六十周年記念事業として編纂された中華民國新地圖はその體裁に於て將又その内容に於て既往に出版された支那關係の如何なる地圖帳にも優つて居り、中國分省新圖はその縮約版で共に東洋史支那地理研究者の座右に備へて參

照すべき良書である。

本地圖帳は北平の地質調査所長丁文江氏の計畫に創り翁文灝曾世英兩氏共に編纂の任に當られ、地質調査所圖書館が年來蒐集しつゝあつた内外の材料を用ひて成つたものである。先年紹介者は北平地質調査所を訪れ、その事業が最早外人の指導援助を離れ、支那人のみにて着々と成果を挙げ居る事を見て感歎した次第であるが今又この地圖帳に接して、丁、翁、曾氏等の努力に對して敬意を表すると共に、支那に於ける印刷術の進歩と五ヶ年に亘る編纂費を負擔し、之を印刷出版するに至つた申報の存在とを注意したい。編纂者の一人であり確か東大地質學科の出身者である翁文灝氏は序文に於て本地圖帳が支那地理學上占むる處の地位を簡結に述べて居り、曾世英氏は技術上の諸問題を解説してゐるから次に兩氏の序を主として本地圖帳を紹介しよう。

新地圖の體裁は長さ三五種廣さ二十五種でステーラーのハンドアトラスより稍短いが我が小川博士の日本地圖帳より稍大である。分省新圖の方は二一種×二七種で我が中等學校で使用される諸地圖に比して遙かに大である。

内容に於ては、新地圖分省圖共支那全體に關するものとしては政區、地文、交通の三總圖、氣象圖、重要城子及農戶分布圖、礦産、農産各分布圖をあげ、支那の地文人文の大觀に便して居り部分圖としては新地圖では二百萬分一の縮尺を採用して全土を二十二地域にわけ、各々地文詳圖と人文詳圖とを載せ合して四

十四枚に達し尙重要城市圖を二葉加へてゐる。分省圖は大體三百萬分一縮尺により大抵各省毎に一葉あり重要城市は各葉の一隅に挿入されてゐる。總圖はアルベルス投影法により部分圖は多圓錐投影法に従つて居る。舊來の支那製地圖帳が方格圖やせいんメルカトル圖を用ひたに過ぎないのに比ぶれば格段の進歩であらう。

正確なる地圖を得る爲には先づ各地に於ける經緯度の觀測が必要であるが、支那に於ては清初康熙乾隆の時代に天主教宣教師等が行つたものが主なる材料で之迄各國で作られた支那圖は何れも之を基礎としたのであるが、その間轉載時の誤謬が多かつた。本地圖帳では一舊記により地點を確め又最近の觀測を利用して正確を期したと云ふ。又所載の山川の形勢に就いても多くの考訂がなされてゐる。

地形の表現はすべて等高線によつて採色をした爲に地貌は、我が百萬分一東亞輿地圖や二百五十萬分一東亞大陸圖よりも極めて鮮明に畫き出されてゐる。更に人文詳圖は地名をなできる限り採録して居り支那地誌の研究に至大の便益を供するものと思はれる。

更に讀者にとつて右難い事は百八十頁(分省圖では六八頁)に達する地名索引が卷末に附せられてゐる事であつて普通辭典の分類及次序に従つた索引であるから、その使用は極めて便利である。又ローマ字に如何なる漢字が當てられるかを示す爲に羅馬字國語拵音檢字があり、王雲五氏の發明にかゝる四角號碼檢

字法なるものも附加されてゐる。

尙附録として各省區面積表、鐵路里程表がついてゐる。地圖の編纂は修史事業と一脈相類する處あり、一國文化の消長を知るべき一つの指標と考ふる事ができるが東洋の先進國を以て任する我國にこの新地圖に優る程の大地圖帳の完成せられん事を希望して止まない。(米倉)

●東洋文明史論叢

桑原 隲 藏著

この書は桑原博士遺作集の第二部に當り、博士の數ある論文
中支那文化及び東西兩文化の交渉に關するもの左の十三篇を
擇んで收載せられてゐる。

歷史上より見たる南北支那

紙の歴史

經子に見えたる宋人

支那人間に於ける食人肉の風習

唐宋時代の銅錢

長安の青龍寺の遺趾に就て

司馬遷の生年に關する一新説

隋唐時代に支那に來住した西域人に就て

明の龐天壽より羅馬法皇に送呈せし文書

創建清眞寺碑

支那人を指すタウカス又はタムガシといふ稱呼に就て

支那の記録に見えたるイスラム教徒の猪肉食用禁制

新發見のカトリック教の宗論關係の二史料

論文各篇は何れも博士生前數種の學術雜誌上に發表せられて、學界の舉つて重んずる處となり、現在に於ても東洋學研究者の必讀、常に參考とすべきものとされてゐるもののみであるから、今更茲にその個々の内容紹介を贅する必要があるまい。尙卷頭には博士壯年時代の寫眞及び羽田博士の序文があり、卷末に索引が附されてゐる。

(京都弘文堂、五一七頁・價三・八〇)(内田)

●渤海國志長編 二十卷

編者金毓紱氏は現今奉天公署參事官にして奉天の國立圖書館副館長を兼任、滿洲國屈指の學者として令名高き人。本編は氏が遍く日支鮮の史籍を涉獵し、北は吉林・黑龍江二省に走り、東は朝鮮半島を極め數年間腐心研鑽の末先頭上梓の運びとなりしものである。渤海國志長編なる書名は氏は満足はさせなかつたが最初に氏を刺戟誘掖する所ありし唐晏の渤海國志に負ひ、李燾の續資治通鑑長編に倣つて長編と附加せしものといふ。その體裁は

卷一總略上、卷二總略下、卷三世紀、卷四後紀、卷五年表、卷六世系、卷七大事表、卷八屬部表、卷九宗臣列傳、卷十諸臣列傳、卷十一士庶列傳、卷十二屬部列傳、卷十三遺裔列傳、卷十四地理、卷十五職官考、卷十六族俗考、卷十七食貨考、卷十八文徵、卷十九叢考、卷二十餘錄、より成り別に附圖二幅を添えてゐる。その引用書目は一百三十餘種を算へ、その列傳所收